

(別紙 2)

審査結果の要旨

氏名 大高 瑞郁

本論文は、成人形成期の子どもを対象に、父親への肯定的態度が子どもの職業的・政治的社会化に与える影響、および、子どもが父親に対して抱く態度が、母親視点の取得や父母関係の認知に規定される過程を検討したものである。論文は、従来の研究成果の展望と問題点の指摘を含む「問題」と、調査データに基づく議論を展開した「実証編」、および「総合考察」により構成されている。

まず「問題」部での関連する先行研究の展望では、父親と子どもの関係に関する実証的検討の不足を指摘したうえで、父子の相互作用が子どもの政治的・職業的社会化に影響を与える可能性を指摘し、それを実証する研究の必要性を主張する。さらに、これまでの夫婦関係や母子関係研究の成果を父子関係にも適用し、父親の行動や家族関係に関する子どもの認知に焦点を当てたアプローチの重要性が論じられる。

「実証編」では、これらの問題意識のもとに行われた調査データの分析結果を報告している。[第Ⅰ部]では、成人形成期の子どもを対象とした大規模な社会調査データの二次分析により、父親との同一視が、子どもの非正規雇用に対する否定的な態度につながること(研究1)、父子間の政治的会話が、子どもの政治的有効性感覚や政治関与を高めること(研究2)を実証し、成人形成期の子どもが、父親に対して肯定的な態度を持つことで、子どもの職業的・政治的社会化が促進されるという結論を導いた。[第Ⅱ部]では、成人形成期の子どもおよびその父親・母親から取得した調査データをもとに、母親の父親に対する態度は、“子どもが認知する”母親の父親に対する態度に影響することを通して、子どもの父親に対する態度を規定すること(研究3)、「父親が自分の視点を取得している」と子どもが認知することが、父親の否定的行動に対する非難を抑制すること(研究4)、母親の視点を子どもが取得することで、“子どもが認知する”母親の父親に対する態度が、子どもの父親に対する態度に影響することを明らかにした(研究5)。

以上の結果に基づき、総合考察では、良好な父子関係が、成人形成期の子どもの政治参加や就労という社会活動を促進することの意義や、父母間・母子間関係が、父子間関係と相互依存的に機能しうるダイナミックスが存在することを議論した。

子どもの性別の効果や兄弟・姉妹との関係、父親の特性などの重要な要因について未検討であるという課題が残るものの、従来軽視されていた父子関係の意義を実証的に論じた功績は大きい。よって、本委員会は、本論文が博士(社会心理学)の学位を授与するにふさわしいものと判断する。